

2008年 秋学期レポート

富田 望

はじめに

このセメスターは East Bay University の Workshop と Ohlone college を同時進行で進めていたので、時間的に慌ただしいスケジュールであったが、終わってみるとかなり有意義的なセメスターであったと思う。

Workshop を通して

この Workshop のおかげで、GRE の為に必要な必須単語をざっと一通り学ぶことができたし、少なくともこういった内容の問題が出てくるのかと、だいたいのおおまかな試験内容を把握できたし、また慣れを通して「予想」することもできるようになった。またそのクラスの教授が中国出身者で、彼自身の経験を度々話ししてくれる時があった。その話には面白みがあり、International student ならではの苦労話や、アジア人ではならぬ見方も加えて解説してくれた。授業を受ける際にノートテイクと通訳者をお願いしたのだが、その質がとても低い。勝手に意見を加えたり、解説を加えたりするなど通訳者にはあってはならぬ行動もする。改めて Ohlone college の deaf center がどれだけ聾者へのサービスや、対応に気を配っているかを実感した時であった。

Deaf Culture と Development of Deaf Children から得たもの

この2つのクラスは私にとって一番興味深い題材で、このセメスターでは、一番熟慮させられた内容であった。というのは、このクラスが、私の一番得意分野である deaf education に一番近いものがあるからだろう。deaf culture では主に聾者の文化に集中し、私たちの考え、経験にもとづいて議論しあうものである。このクラスでは健常者の参加が認められていないという徹底ぶりであるから、それだけに議論内容も深く、面白いものになる。私自身の経験からいうと聾者はよく「これを聾文化という」というように定義づけようとする習慣があり、なぜこれが「文化」として定義づけられるのかを、日本人聾者はよく分かっていないことが多い。なぜならば、彼ら自身の言語、「手話」がきちんとした「言語」であるという認識の低さからくるであろうと予想する。日本では日本手話研究会という団体があり、彼らの活動は、ろうあ連盟、日本聾者にとっても絶大な影響力を与えている。こういった私たちの言語をまもるという言

い方は可笑しいかもしれないが、「言語を知る」機会、場所があるということは聾者のようなマイノリティグループに属する人達にとって意義がある。

development of deaf children では、子供の発達論界では有名な Erikson's theory、Freud's theory など様々なセオリーについて学ぶだけでなく、聾児の場合はどうなるかということで、それぞれが、各経験や、考え方にそって仮定の理論を出し合う。そうして、指導のもと情報収集や、実践などをして、レポートし合うといった、college レベルにしてはハイレベルな内容であった。この経験を通して、言語発達理論が私の興味分野内であることが分かったし、これについてはまた自分でリサーチしていきたい。

生活

新しいホームステイ先での生活にも慣れて来た。新しい家族はとてもアットホームでかなり流暢な ASL を使う。それでか彼ら自身のルーツが自分と同じだと感じるのに時間がかからなかった。自分が何者で、どこに属しているかは、自身の経験や考え方からでもすごく分かっていることであるのにも関わらず、事実のここでの快適な生活が、言葉による説明を要しないほどに、私のルーツを物語っている。

院入学にむけて

このセメスターを通して私の中で浮かび上がってきた一つの可能性についてはまた今後熟慮していくつもりだ。聾児の言語発達のしくみは英語教育にもあながち無関係ではいられないし、自分が興味をもっている分野のひとつであるから、これについてはまた再検討していく姿勢でいる。